

**特集1****諏訪天文同好会設立 100 周年企画について****大西浩次（国立長野高専）****1. はじめに**

「市民科学によって天文文化はいかに誕生し、何を生み出してきたか」という問いを出発点として、設立 100 年を迎える日本最古の市民天文同好会の一つである諏訪天文同好会を対象とした調査研究を進めている。

諏訪天文同好会は、五味一明（1911-1990。とかげ座に新星を発見 1936 年）や古畑正秋（1912-1988。東京天文台第 8 代台長）、青木正博（1920-1984。日本星空を守る会の会長。霧ヶ峰の自然保護運動）を始めとする多くの人材を輩出してきた。

ところで、「長野県は宇宙県」（2016-）のワーキンググループの一つである長野県天文文化研究会では、2019 年より長野県内外の天文文化の調査研究を進めてきた。この活動の中で諏訪天文同好会の諸活動が、現在の「長野県は宇宙県」のルーツとなるだけでなく、日本における天文学や天文文化の黎明期に、非常に重要な役割を果たしてきたことが分かってきた。そこで、諏訪天文同好会の設立から 100 年を迎えることもあり、現在、設立当時の状況に焦点を当てて、調査研究を進めている。これは、ほぼ 100 年前、1920 年前後の諏訪を中心としたローカルな天文活動を、いまでいう「市民科学」という文脈で見直すことにより、今後の「市民科学」のあり方を考える具体的モデルの一例となると期待して、定期的に研究会を行っている。

ところで、この「市民科学」とは、1990 年代より欧米で発展してきた Citizen Science（シチズンサイエンス）の日本語訳として、市民の参加による学問への寄与を含む広範囲の科学的活動を指す言葉である。初期の「市民科学」の活動は、eBird や Galaxy Zoo の様に、科学者（プロ）によって企画されたプラットフォーム

に、市民（アマ）がデータ収集などのアウトソーシングとして参加する形態であった。しかし最近、ICT の発展やオープンサイエンスやオープンデータの流れを受けて、従来の枠を超えた活動も始まろうとしている。さらに、科学教育や科学政策の上でも、「市民科学」が重要な活動の一つであるとして注目されている。

**2. 設立 100 周年記念シンポジウム案**

「長野県は宇宙県」では、諏訪天文同好会の設立 100 周年を迎えるにあたり、これまでの調査研究の成果報告と今後の研究の展開を考えて、2022 年 11 月に記念シンポジウムを開催する予定である。諏訪天文同好会創立当時の 1920 年代を中心に、日本のプロアマの天文学黎明期の研究や組織などの交流と変遷を中心に、関係者向け研究会と 100 周年を記念した市民向け講演会の二本立を考えている。研究会では、太陽観測史、変光星観測史、長野県と日本の近現代天文史をテーマに実施する。また、一般向け講演会は、諏訪東京理科大学を会場として、土井隆雄（元宇宙飛行、京都大学）の招待講演を含む記念講演を行う予定である。また、このシンポジウムと同時期に、茅野市八ヶ岳総合博物館や長野市立博物館にて、諏訪天文同好会設立百周年を記念した企画展示を行う予定である。

**3. まとめ**

諏訪天文同好会の設立 100 周年を記念したシンポジウムを 2022 年 11 月に長野県茅野市で開催する予定である。これは、5 年計画で始まる天文文化研究の第 1 弾である。今後の調査研究の進展に期待してほしい。

**大西浩次**